

筋肉の末梢神経に原因物質蓄積

徳大など研究グループ発見



和泉唯信教授



森野豊之教授

ALS早期診断に光

徳島大などの研究グループが、体が徐々に動かせなくなる難病、筋萎縮性側索硬化症（ALS）の患者の筋肉にある末梢神経に特有のタンパク質が蓄積することを突き止め、23日に記者「ユーロロジー」電子版に掲載された。

ALSは、脳や脊髄の運動神経内にTDP-43というタンパク質が蓄積すること

で発症する。ALSのマウスを使った実験では、筋肉とつながる末梢神経にも

TDP-43が存在することが分かってきた。

今回の研究では、ALSで亡くなった10人と、別の病気で亡くなった12人の筋肉の末梢神経を調べ、TDP-43の蓄積状況を分析。

ALS患者全員から蓄積が確認できたが、別の病気の患者からは見つからなかった。また、過去に筋肉の生

体検査を受けていた71人の筋肉片を解析したところ、末梢神経にTDP-43が蓄積していた33人は後にALSと診断され、ALSではなかった38人には蓄積していなかった。

研究は、徳島大学院医歯薬学研究所の森野豊之、和泉唯信両教授や広島大学院教授らが2004～19

ALS 脳からの命令を筋肉に伝える運動神経細胞が侵される難治性の神経疾患で、国の指定難病。発症すると、全身の筋力が低下。次第に呼吸ができなくなり、3～5年以内に死に至るケースが多い。1年間の患者数は約9千人、徳島県内は約80人。

年採取した検体で実施。徳島大などによると、脳や脊髄の神経は切って調べられないため、現在は生前に病理診断する方法はなく、問診や複数の検査を組み合わせてALSかどうかを判断している。筋肉なら生体検査が可能のため、より早期に診断できる。

会見は広島大で行われ、徳島大の両教授はオンラインで参加した。森野教授は「早期に病気を確認できる画期的な方法」と語り、和泉教授は「発症1年以内でかなり進行するので、初期の段階で診断できるのは重要だ」と述べた。ALSの研究では、徳島大の梶龍兒特命教授、和泉教授のグループが5月上旬、ビタミンの一種を高用量で投与することで発症1年以内の患者の進行を抑制する効果があるとの研究結果を発表した。

(南志郎)